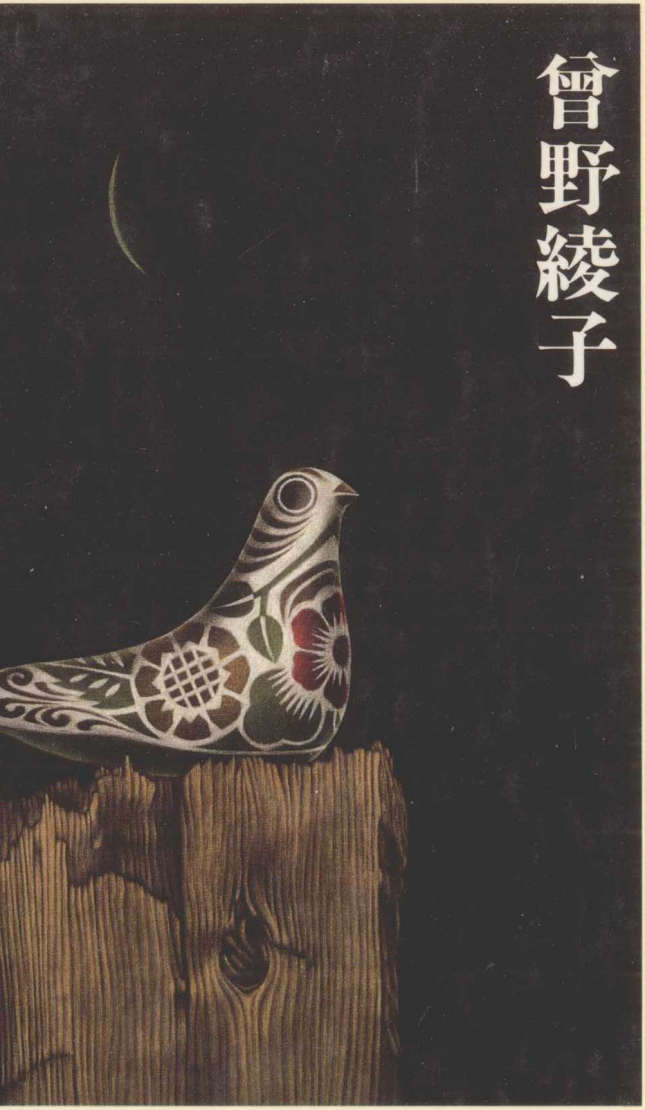
夜明けの新聞の匂い

曾野綾子



新潮社

夜明けの新聞の匂い

曾野綾子

新潮社

夜明けの新聞の匂い

著者　曾野綾子（そのあやこ）

一九九〇年六月二五日　発行
一九九〇年八月　五　日　四刷

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

振替　東京四―八〇八

印刷所　株式会社光邦　製本所　植木製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Ayako Sono 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-311408-8　C0095

夜明けの新聞の匂い＊目次

I

夜明けの新聞の匂い　9
狂奔する善人たち　16
〝罪なき旗〟があるか　24
死んでもいい旅　30
探偵ボタンを探す　37
『危険な話』の中の危険な話　45
刺客は修道女に成り済ます　53
立ち尽くす私　61
偽善者の祈り　68
懸賞小説に落選する法　75
大臣の背広、スギさまの小袖　83
くず湯の時間は何時か　90
ぴかぴか能登路　98
談笑のテント　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

女々しい勇者 117
神の奴隷の栄光 124
たかが珊瑚 132
「国営国家」の悲喜劇 141
闘争もどき、オペラもどき 150
行っていらっしゃい、ボイジャー 158
「お読みいただけたでしょうか」 165
どちらも勝たなかった？ 175
息子でも猫でも植木でも 182
著者会心の作 189

II

トレーナーを着たゴリラたち 199

III

私の「死の準備」 215

装画　広田　雅久

夜明けの新聞の匂い

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

夜明けの新聞の匂い

毎朝ほとんど、夜の引き明けに眼を覚ます。十代の頃からの癖である。血圧が低いのに、目覚めは実に爽やかなのがおかしい。昔は早寝だったが、三十代の終わりから、突然、六時間寝ればよくなった。だから眠りに就くのは、十一時半か十二時ころである。

眠る時間が少なくていいということは、すばらしいことである。時間がたっぷり使える。（というほど普段勤勉ではないのだけれど……）

朝は、雨戸を開けて、読書の時間である。日の出の色は、胸が躍るほど感動的である。まだこんなふうにわけもなく感動できる、ということに感動する。（そこらへんが少し年寄りじみている）

まもなくゴトゴトと音がして、夫が雨戸を開け、新聞を取りに階下へ行く。我が家は寝室が別である。これがまた、自由を確保する上でこの上ない。お互いに眠りたい時に眠り、夜中でも目覚めれば本を読んだり、くだらない映画のヴィデオを見たりしている。

それにしても、男はパジャマのまま門のところまで新聞を取りに行けていいなあ、と私は思う。

寒い日には、せめてガウンを着て出てくださいと頼んでいるのに、今日も恐らく着ていないに違いない。そういうことをしていると、今に脳溢血で引っ繰り返るだろう、と思ったりしているが、サービスの悪い妻は、夫が取ってきた新聞を「おはよう、はいよ」と言いながら投げ入れてくれるのが、正直言ってほんとうにありがたい。それからしばらくが、私が新聞を読む楽しみの時間である。

新聞は五紙取っている。そのうちの一紙は英文である。英字の新聞は日本の新聞の内容の補正のために必要だと夫は言う。私は英語の新聞を読むのがめんどうくさい。語学力をつけるために毎日読め、と言われているのだけれど、なかなか続かない。必要なことは、夫が朝食の時にダイジェストを日本語で（あたりまえのことである）話してくれる。

私はつい先年まで、新聞がこんなにおもしろいものだとは思わなかった。いつか或る奥さんが、新聞記事は死亡記事から読む、と言っているのを聞いて驚いたことがある。その夫人は、よく気がつく奥さんなのであろう。だから、知人が死んだのを知りませんでした、では済まないと思って死亡欄から眼を通すのだろうと思う。しかし私はそういう気になれない。死亡記事を読む時もあるが、それは、今日亡くなった方たちは、いったい何歳で何の病気だったんだろうか、と興味をもつ日だけである。だから私はよく知人の死んだことを知らないで失礼をする。

全く読まないのはスポーツ欄だけである。経済欄もこの頃はよく眼を通すようになった。アメリカの日本叩き、日本のアメリカ叩きというのは、正直言って、私のように経済活動をしていない者には少しおもしろいドラマである。そのドラマを二倍楽しもうとするには、経済欄を読まな

いといけない。株価と為替相場がこんなにおもしろいものとは思わなかった。

投書も、文化面も、読書欄も何もかも私の心臓を目覚めさせてくれる。三面記事はもちろん、新聞の花である。自分がインタビューを受けた時の体験などを重ねて見ると、随分不正確なんだろうなあ、と思いながら眉に唾つけて読んでいるのだけれど、その緊張感がまたいい。

私はデータをファイルするコンピューターを持っているので、それに入力するために切り抜きを作る。私はほんとうにイヤラシイ、シツコイ性格で、これは取って置かねばならないと思う記事は、がっちり保存する。もっとも大切なものに限ってよくなくすけれど。どれがとっておくべき記事かということは、私の頭の中にちびた庭箒（にわぼうき）まがいのスクリーンのようなものがあってそれにひっかかったものが該当する、という素朴なものである。でもこんなに楽しんで、購読料が一紙あたり月三千円ちょっと、何と新聞というものは安いのだろう。

さて一九八八年一月二十四日は日曜日。何となくゆっくり新聞の読める日でもある。

「暴力団組長に『感謝状』・練馬区五十万円寄付受けて・『区議の紹介でつい』あわてて返金」という見出しを読んだ時の第一印象は、あれ、どうして暴力団から寄付を受けてはいけないのだろう、ということだった。

経緯は次のようなものである。練馬区内に住む暴力団組長は身分を隠して「長年、練馬に住まわせてもらっているお礼に」という名目で、公明党区議を仲介に立て、去年秋、区に五十万円を寄付した。この組長は金融業やパチンコ店の景品交換所などをやっていた。寄付金は夫人が持参し、区は領収証と感謝状を渡した。つまり寄付者がどういう職業の人か知らなかったというので

ある。

その後「情報」によってその金の出所が暴力団組長だということがわかり、紹介した区議を通して、金は返すから、感謝状、領収証も返してほしい、と申し入れた。助役氏は次のように言っている。

「暴力団の組長と分かったので区民の疑惑を招かないようにと、お金はすぐに返した。寄付は善意の表明で、まさか、お金の出所や本人の仕事まで聞くことはできない。おまけに区の有力者の紹介があれば、なおさらだ」

区議氏の弁「面識はなく、暴力団員であることも知らなかった。（中略）反省している」

区議氏によると、この暴力団組長の夫人は「会社の利益の一部を寄付金にするよう税理士に助言された」と語ったという。新聞の書き方には、寄付を脱税の隠れ蓑にしようとしたというニュアンスがうかがえる。

暴力団員からは寄付を受けてはいけないという法はどこにもないだろう。もしそれが正義だと考えているなら、それは、差別以外の何ものでもない。普段正義の味方ぶりを示す新聞が、社会がこういう形で、暴力団員が見せかけだけかもしれないが「善行」をするのさえ締め出すようなことをしている練馬区に対して、私の読んでいる限り一社も非難していない、というのはどうしたことだろう。

この場合、「善行」は見せかけではない。五十万円は寄付されているのである。第一に、人の行為が見せかけかどうかがわかる、と簡単に判断するのは、人間の思い上がりである。第二に、

動機は不純でもいいのである。我々の行動のすべては、多かれ少なかれ不純である。行為そのものが悪くなければ、それを止めることはない。

練馬区も何という定見のなさであろう。この金は汚くて、この金はきれい、というほど、個人の内面の調査を練馬区はしているのだろうか。としたら恐ろしいことである。公的機関に寄付された金がどんな金であるか、区役所は警察ではないのだから、知る必要などまったくない。くれるという金なら堂々と貰うべきだ。個人がもらうのではない。暴力団員の金と知ったから金を返すという行為は、その組員が脱税操作を頼む時、応じる可能性をみずから認めたことと同じではないか。堂々ともらっておいて脱税の手心など全く加えないという、毅然たる姿勢を示すこと以外にない。

寄付が脱税の助けにならないということが知れ渡れば、下心ある寄付は自然なくなるだろう。しかしいつかある暴力団員が、ほんとうに社会のために役だてる寄付をしようとした時に、それを断ったのなら、こんな非教育的なことはない。

区議も一体何を反省するというのだろう。寄付をしたいという人を取り次いだだけなら、全く反省する必要などない。暴力団にいささかでも関係することに自分の名がでることが困るという態度は、評判を失うのをおじ恐れている迎合の姿勢を示すだけである。もし暴力団員には寄付さえもさせないということであれば、それは重大な人権問題であり、それこそ練馬区のやり方は暴力的である。受取や感謝状を返した方も返した方だ。私が組長の妻だったら、一度もらったものは決して返さない。区や新聞の態度を見ていると、暴力団は悪いことしかしてはいけないみたい

だが、そうでない証拠に、断じて取っておく。

おもしろいことに今から二千年前、既に聖書は次のように書いている。

「不正なマンモン（富）を利用して、自分らのために友人を作りなさい。（中略）ごく小さな事に忠実な者は、大きなことにも忠実であり、ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、もしあなたが不正なマンモンを用いるのに忠実でなければ、誰があなたに真の富を任せるだろうか」（「ルカによる福音書」16・9〜11）

金は不正な手段で得ることも多いが、そのこととその金を善用することとは、全く別だ、という考えである。「不正な富を利用する」ということは、富を施しに使うことである。その結果として「友人を作る」というのは、金の力で自由になる人間関係を作るということではない。その善行によって神に認められることをさしている。

金は汚くても、汚い金ほどきれいに使う技術と温かさがなければならない、ということを二千年まえからユダヤ人は知っており、イエズスはそのことに真向から触れたのである。

聖書はさらにもう一つのエピソードを書いている。

エリコの町に小男のザアカイという取税人の頭がいた。当時の取税人というのは、占領軍であったローマの手先になって、税金を取り立て、しかもかなり無茶苦茶な額をふっかける者が多かったので、皆からひどく嫌われていた。

イエズスがエリコに入った時、しかしザアカイは一目イエズスを見たいと思い、背が低いのでイチジクグワの木に上って見物した。するとイエズスは彼の姿を眼に止め、ザアカイを呼び、わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c